

11 桂離宮と修学院離宮

かつらぎゅうとしゅがくいんりきゅう

知る

京都の離宮

離宮とは、皇居以外に設けられた宮殿のことです。東京では赤坂離宮や芝離宮が迎賓館や旧芝離宮恩賜公園に姿を変えて今にその面影を残しています。京都に現在残っている離宮は、西京区にある桂離宮と左京区にある修学院離宮の二つです。

京都の離宮は江戸時代には「山荘」や「別業」「茶屋」などと呼ばれていましたが、明治維新以後、岩倉具視(一八二五〜一八三三)が発案した京都保存政策の一環として、建物が宮内省の管轄下に置かれ、離宮という名称が正式に使用されるようになりました。ちなみに、二条城も明治十六(一八八三)年頃には「二条離宮」と称し、保存の対象となっていました。桂離宮は後陽成天皇の異母弟である八条宮智仁親王(一五七九〜一六一九)とその息子の智忠親王(一六一九〜一六二二)によって、修学院離宮は後水尾上皇(一五九六〜一六八〇)によって造営されました。

王朝文化へのあこがれ

桂離宮・修学院離宮の造営がはじめられた慶長から寛永の時期(十六世紀末〜十七世紀前半)、京都では、公家や上層町衆を中心に、絢爛豪華な桃山美術とは趣を異にする、平安時代の貴族が好んだ王朝文化に関心が高まりました。

池に浮かべた船上で和歌を詠み、管弦をかなで、酒宴を設

けるといった、『源氏物語』などで描かれる王朝文化的な生活にとつて、郊外の山や川に臨んだ場所に造営された両離宮は、まさに理想的な場所でした。そのため、いずれの離宮も王朝文化を实践するため、数寄屋造の建物群のまわりには意匠を凝らした茶屋を配し、船遊びなどができる広大な苑池を造営しています。

八条宮智仁親王 桂離宮の創始者

八条宮智仁親王(一五七九〜一六一九)は、正親町天皇の第一皇子陽光院誠仁親王の第六子として、天正七(一五七九)年に誕生しました。勤修寺晴豊の娘晴子(新上東門院)を母とし、幼名を胡佐麻呂(麿)と称しました。智仁親王は天正十六(一五八八)年、豊臣秀吉の猶子となり、豊臣家の継承者として期待されますが、翌十七年に側室淀君に男子鶴松が生まれたために解消、同十八年八条宮家を創設し、翌年には親王宣下を受けて智仁と名乗り、式部卿に任ぜられました。

その後、豊臣政権の庇護を受けて皇位についた後陽成天皇は、秀吉の死後、慶長三(一五九八)年十月、突然、天皇の弟にあたる智仁親王への譲位の意を表明します。



東側から見た桂離宮の模型(京都文化博物館蔵)

しかし、この讓位の儀は中止となります。

智仁親王は幼少から学才にすぐれ、早くから細川幽齋（一五四〜一六一〇）に歌道を学んでいましたが、讓位の一件以後は、『万葉集』『古今集』『源氏物語』など古典文芸へ深く没頭するようになり、慶長五（一六〇〇）年には、二十二歳で幽齋より古今伝授を受け、名実共に当代を代表する宮廷文化人に成長しました。その後、親王は桂離宮造営に着手します。

後水尾上皇 修学院離宮の造営者

後水尾上皇（一五九六〜一六八〇）は、後陽成天皇の第三皇子として慶長元（一五九六）年に誕生しました。名は政仁といい、生母は前関白 近衛前久の娘前子（中和門院）です。

はじめ、後陽成天皇は、弟の八条宮智仁親王に讓位する意向でしたが、前関白九条兼孝と内大臣徳川家康の反対があり、実現されませんでした。その後、東宮（皇太子）となった政仁親王が慶長十六（一六一一）年に即位します。

讓位の時期も政仁親王への皇位継承も、後陽成天皇の意に反するものでしたが、徳川家康の強引な干渉によって実現しました。この政仁親王は徳川政権のもとで即位した最初の天皇で、その即位は幕府による朝廷支配の第一歩でした。元和六（一六二〇）年には徳川秀忠の娘和子（後の東福門院、一六〇七〜七八）を女御として入内させ、寛永三（一六二六）年には二条城行幸が盛大に行われ、朝幕関係は好転するよう見ええました。

しかし、その翌年、禅僧に紫衣着用を許す天皇の綸旨が幕府によって無効となった「紫衣事件」を契機として、寛永六年、にわかに女一宮興子内親王（明正天皇）へと讓位します。

上皇となった後は、当時の文化人の中心的存在となり、修学院に山荘を造営、庭内に窯（修学院焼）を開きました。

歩く／見る

桂離宮 西京区桂御園

八条宮家（後の桂宮家）の別荘として造営された桂離宮は、『源氏物語』松風の巻にみえる「桂殿」のモデルになったと伝えられる藤原道長の桂山荘の故地で、藤原師実・忠通なども別荘を構えました。

桂離宮は、八条宮家初代智仁親王と二代智忠親王により、約五十年、三次にわたる造営と改修を経て成立しています。第一次の造営は、元和元（一六一五）年頃、智仁親王がこの地に「瓜 畠のかるき茶屋」と称する簡素な建物を営んだのがはじまりで、これが古書院の原形をなし、寛永元（一六二四）年頃、作庭も含めて一応の完成をみました。



桂離宮 平面図

同六（一六二九）年、智仁親王の死によって茶屋などは急速に荒廃しましたが、同十八（一六四二）年、智仁親王の息子である智忠親王が第二次の造営を開始し、従来の古書院に接続して中書院を増築し、庭園には五力所の茶屋を設置しました。

その後、明暦四（一六五八）年と寛文三

(一六六三)年の後水尾上皇の御幸に際し第三次造営を行い、中書院南側の楽器の間・新御殿の建設とともに、庭園を大幅に整備し、第二次造営の際の五力所の茶屋を廃し、松琴亭・月波楼・賞花亭・園林堂を設営しました。明治十六(一八八三)年には、建物を宮内省に移管して離宮と称するようになります。現在、桂川の流れを引いた大池の西に、東より古書院・中書院・楽器の間・新御殿が並んで建っています。桂離宮の建物と庭園の融合調和は、ドイツ人建築家のブルノ・タウトが戦前に記した『日本美の再発見』(岩波新書)によってその美しさが世界に紹介されました。昭和五十一年から同五十七年にかけて、解体大修理が行われました。

松琴亭 池の東岸に建つ茶屋で、入母屋造茅葺の屋根をもつ一の間・二の間、柿葺屋根の茶室などによって構成され、中央に坪庭を設けた口の字形の建物です。いたるところに変化に富む意匠が見られ、特に一の間北側の深い土庇、その下に張り出した板縁に設けられた竈構え、一の間南側の床・袋棚など、独創的な構想で造営されています。

月波楼 古書院の北の小高くなつたところに建つ茶屋で、寄棟造柿葺、一の間・中の間・口の間の三室と竈構えをもつ板敷からなり、これらがコの字形に配列されて入り口となる土間庇を囲んでいます。簡素・軽快な構造で、一の間に竹の竿縁天井を張るほかはすべて化粧屋根裏をみせており、竹の垂木と小舞、丸太・面皮材・皮付の曲木を自由に組み合わせた軸組など、定型にとられない奔放な構想力を駆使しています。全体としてきわめて開放的で、中から庭園の景観を楽しむために、部屋の配置や開口部に細心の工夫が施されています。

賞花亭 賞花亭は、中島山上に建つ峠の茶屋といった風情で、切妻造茅葺、間口一間・奥行一間半の小規模な建物であり、洛中の八条宮本邸にあった茶屋「竜田屋」を移建したものと推定されます。正面の壁面には竹の粗い連子窓が開けられ、その左右の袖壁には下地窓がつくられています。この連子窓と下地窓の配分や形の比例のよさは見事です。また、この茶屋からは離宮殿舎の全景が眺望できます。

園林堂 園林堂は、智忠親王の代に造立された賞花亭の西側にある宝形造本瓦葺の建物で、屋根に唐破風の向拝をつけた、方三間の仏堂です。桂離宮にある建物の中で唯一この小堂だけが本瓦葺で、堂内には観音像のほか宮家代々の位牌と画像を安置し、傍らに細川幽斎の画像が祀られています。

修学院離宮 左京区修学院藪添
桂離宮と並ぶ江戸初期の代表的な山荘である修学院離宮は、寛永六(一六二九)年に退位した後水尾上皇が企画した洛北の地にある広大な山荘のことです。当地には以前から上皇の茶屋である隣雲亭がありました。明暦元(一六五五)年、東福門院とともにこの近くに住む円照寺尼宮(上皇の第一皇女)の草庵に御幸した際、改めてそのすぐれた風光に魅せられ、翌二年から大規模な山荘造営に着手し、万治二(一六五九)年春に一応の完成を



修学院離宮 平面図



修学院離宮 上御茶屋

みます。

現在離宮は上・中・下の御茶屋から構成されており、上御茶屋はこの隣雲亭を中心に計画され、広大な苑池(浴龍池)と中島をつくり、その中島には窮邃亭があります。また、池には中島に渡る楓橋・土橋、中島と万松塙(大きな二個の石をいたたく島)を結ぶ千歳橋が架けられ、隣雲亭からは、遠く鞍馬・貴船・岩倉・松ヶ崎・愛宕の山々を背景に、京都の市街が一望できます。

一方、山麓に営まれた下御茶屋は、上皇が御幸の際に御座所とした使用した寿月観を中心に、茶室蔵六庵・御清所(台所)などの付属建物を配しています。

また、中御茶屋は楽只軒・客殿などからなり、後水尾上皇の没後、第八皇女朱宮光子内親王によって建立された尼門跡寺院林丘寺(現左京区修学院林ノ脇)が隣接しています。

窮邃亭(上御茶屋) 窮邃亭は、三間四方の宝形造柿葺の建物で、東と南は深い土庇が、池に面した西と北には肘掛窓がそれぞれ取り付けられています。この建物は上・中・下御

茶屋の中で、造営されてから今日まで建て替えられていない唯一の建物であります。各部の材料はすいぶん取り替えられて新しくなっています。南の土間庇の軒下には、後水尾上皇宸筆による「窮邃」の額が懸かっています。寿月観(下御茶屋) 寿月観は、数寄屋風書院造、起り屋根

柿葺の建物で、庭園に面してL字型に部屋が配置されています。これは室内からの眺めと同時に、庭園から見た場合の建物の姿が考慮されたためです。庭園に面した側は全面腰障子で、まわりに濡縁がめぐらされた開放的な外観となっています。障子の外に立つ雨戸は、戸袋を省略するために隅部で回転させて、北側の裏に納まるように工夫されています。また、屋根を軽くみせるために柿葺の軒先は薄い一重軒付となっています。

林丘寺(左京区修学院林ノ脇) 林丘寺は、臨済宗天龍寺派の寺院で、後水尾上皇の第八皇女朱宮光子内親王の朱宮御所(音羽御所)が寺の前身です。朱宮は父後水尾院より修学院離宮内に別殿を賜って楽只軒と称しましたが、延宝八(一六八〇)年、上皇の崩御によって朱宮は落飾、照山元瑤と号し、御所を林丘寺と改め、尼門跡寺院とします。天和二(一六八二)年には本堂が建立され、その後、客殿が東福門院奥御対面所から移建されました。明治の初めには男僧住院となりましたが、明治十七(一八八四)年、宮内省に寺地の約半分を返上、同十九年、楽只軒と客殿を離宮内に残し、現在地に玄關・書院・庫裏等に移して、もとの尼門跡に復しました。現在、離宮内にある客殿は、華麗優美な意匠でまとめられ、床脇の五段の違棚(霞棚)は桂離宮・醍醐三寶院の棚と共に天下の三棚と称されています。

桂離宮・修学院離宮の参観方法

桂離宮・修学院離宮は常時公開されていませんが、参観を希望される方は、宮内庁京都事務所参観係(京都府京都市上京区京都御苑三番)へお尋ね下さい。参観の所要時間は桂離宮で一時間、修学院離宮で一時間十五分ほどです。